

水牛通信

VOL.6 NO.6
毎月1回・10日発行
定価200円

人は牛は
音はたが
もながや
くやす
育すつ

どぶろくとコンピュータ 鎌田慧 2

「スター」日記 ③ 坂本龍一 4

家族・友だち日々の糧 ③ 志沢小夜子 6

料理がすべて ③ 田川律 8

特別休暇 くぼたのぞみ 10

たのしみがない ③ 高橋悠治 12

行ったり来たり ③ 西山正啓 14

子供たち 柳生まち子 16

ブタ草雲にのる 竹内晶子 18

てがみ 桜庭章司 20

ぼくが作った本 ③ 平野甲賀 24

わるいくせ ③ 八巻美恵 26

下手の横吹き笛日記 ③ 西沢幸彦 28

友だちと呑めば本になる ③ 津野海太郎 30

二点カット 柳生弦一郎

どぶろくコンピュータ

4月27日 大宮発十七時ちようどの新幹線盛岡行き自由席は満員。それで指定車に入りこんで空いている席に坐っている。発車まぎわに券の所有者が出現してアウト。永年のカンからすると、この先坐れる可能性はまず、ない。さて、と窓の外に眼を移すと、反対側のホームに列車が入っている。掲示板に、十七時十分発盛岡行きとある。不思議だ。時刻表にはない列車である。そのためか、ガラ空き。

坐りそこねた先発列車がホームを出るのがみえた。通路にぎっしり立ち並んでいる。一方、十分遅れのこっちは方は、前の席をまわし、足を投げだすゼイタクさ。

行き詰まったら横を視よ。そこにはあらたな可能性が待機している。なあって、いい気分。

4月29日 上智大学に留学中のカナ

ダ人と会う。GM(ゼネラル・モーター)で働いていた、というので大いなる関心を示したのだが、まだ初級日本語でいど。意志を疎通するには、あと一年、彼の上達をまつ必要がありそうだ。再会を約して別れる。

4月30日 上野のビジネスホテルでオランダ人記者と会う。バスケット選手二人分の大男である。通訳はP.A.R.Cの山鹿さん。

「日本の少数派運動に可能性ありやいなや」

「可能性は定かならざるも、それしきやないのが、現実である」

などと話す。ズック製のバックに片手では持ちあがらないほどの資料を詰めこんで、彼は日本を去った。「取材は体力」の見本のような男だが、質問項目はよく整理されていた。

5月3日 憲法記念日。神戸の市民運動の集会で彫刻家の金城実と対談。六〇すぎの老人の発言が多かった。満

に演じていいのか、いまだ釈然としない仏頂顔。そもそも、自分で呑むものを自分でつくるのが御法度とは、酒会社と酒屋の利益を保護し、その酷税(マージン)によって三菱や日産などの生産を助けようというものだから、どう考えても非は国家にある。いわば、どぶろくは、平和の象徴である。まあ、いまはやりのコピー流にいえば、「どぶろくかミサイルか裁判」ともいえるんじゃないんでしょうか。

裁判終って、地裁門前の教育会館に三里塚反対同盟のひとなど集まって、どぶろくて乾盃した。

5月9日 長野県坂城(さかき)町。といっても知る人はすくないが、戸倉上山田温泉に隣り合った町。ここはいま、「テクノハート」と自称して、日本のシリコン・バレーたらんとしている。本家のシリコン・バレーのアップル社は、ガレージから出発したサクセスストーリーの典型だが、こちらも鶏

小屋や納屋から輸出メーカーになった成功譚がゴロゴロ。大企業にむこうを張る意気は買うとはいえ、コンピュータや射出成型機を手づくりすると英雄となり、酒をつくと縛につく。おなじ自前でも、労働者を絞るコンピュータはよく、労働者を喜ばす酒は悪い、というのが、大日本の国策なのであります。

5月12日 三鷹市の主婦たちの集会によばれる。愛知、千葉で完成された「管理教育」が、いまや東京にも現れた、との報告が多かった。「朝、あいさつしましたか」「歯を磨きましたか」「ウンチしましたか」○をつけなさい。公教育は、寄ってたかって、従順な人間をつくらせている。教師たちは抵抗せず、率先実行。とにかく「きまり」が好きなのである。抵抗の魂は、三つ子のうちから摘み取られる。

5月13日 愛知の教師一人と千葉の教師二人を集めて座談会。愛知の教師

州」に徴兵されていたという老人が、「敗戦を予知した幹部たちは先に日本に帰っていた」と、いまなお口惜しうに語った。聖戦など、ある訳ない。

5月7日 千葉地裁。「どぶろく裁判」第一回公判を傍聴。被告人は前田俊彦。「どぶろく」といえば「濁酒」よりも「密造」とくるのが中年ものの連想で、それはたぶん新聞記事によって形成された深層心理である。ところが、三里塚住民・瓢箪亭こと前田俊彦は、まったくの下戸にもかかわらず、国税庁が禁じている「どぶろく」を製造し、公然と人を集めて「利き酒会」などをひらき、国家を挑発していまようやく、念願かなって裁判長とむかい合うことができたのである。その冒頭陳述はなかなか格調高く、造る自由を声高らかに主張して好演だった。

一方、起訴状朗読のうら若き女性検事は、どぶろくはおろか清酒でさえ呑んだ気配なく、自分の役柄をどのよう

は校長へのつけ届けに夢中になり、千葉の教師は校長から「バカ女」と罵倒される。教師の世界がいじめ社会となり、人間の荒廃の見本市となったなら、批判的な子どもは暴れるしかない。

締めつけられる一方の教師が、子どもを伸ばすことなど考えられる訳はない。もう三年も春闘ストはなく、ひとびとは出世と自分の生活を考えるだけで精一杯。ひとのことなど、構ってられない時代が、豊かな時代とよばれるようになった。

鎌田慧

「スター」日記

ワーツ、疲れた。今月は疲れた。ひどく疲れている……。

4月16日 音響でソロの録音。4月17日、ホテル・ニューオータニで酒造マイカーのパーティ。音響でソロの録音。打合せ。4月18日、音響でソロの録音。4月19日、赤坂ざくろでCMの録音。NHKで「サン・スト」の録音。ゲスト、ミカドとデュルッテイ・コラム。下北沢の本多劇場で「野獣降臨」（夢の遊眠社）を糸井氏と見る。4月20日、ラフォーレのモッズでカット。音響でソロの録音。4月21日、音響でソロの録音。4月22日、家に居る。もちろんモドキと遊ぶ。なんて可愛い奴だ！ 4月23日、音響、ソロ、録音。4月24日、音響、CMの打合せ、ソロ、録音。4月25日、音響、ソロ、録音。インタヴュー、「広告批評」の島森さんと。

って、ある。5月9日、パルコにロケハン。音響、ソロ、録音。ロビン・トムブソンがSAXを吹きに来る。浅田彰さんがスタジオに遊びに来る。共同通信、インタヴュー。「長電話」の宣伝。芝の大門前の新亜飯店で「長電話」の打上げ。悠治さん、冬樹社、本々堂、編集の秋山氏、協力してくれた糸井氏、浅田氏等。二次会でシリンに行く。午前二時頃まで雑談。5月10日、NHK「サン・スト」録音。ゲスト高橋鮎生君。悠治さんの一番のライバル!? 有栖川スタジオのCMスチール撮り。浴衣を着てソーメンを食べさせられる。マイッタ！ 5月11日、音響、ソロ、録音。ミカドのグレゴリーがドラムを叩きに来る。来週やるフランス国営放送の特番の収録の為にロケハン。グレゴリーは一日かかって一曲を完全にできなかつた。バカヤロツ、頼んだ僕が悪いのだ。フランス国営放送のクルーと会食。5月12日、音響、ソロ、録

お酒を飲むと、すぐロレツが回らなくなる。物を忘れる。4月26日、日比谷で「ノンノ」取材、十数年ぶりの日比谷公園。「ゴロー」取材、神田神保町古本屋街。大学以来だ。僕の世界はなんて狭いんだろー。二、三百円の可愛い洋書も5冊買う。事務所で打合せ。AKKOのコンサートの事、パルコのアド・ウォールの件。4月27、28日、音響、ソロ、録音。全部スタジオで考え、作曲し、演奏する。即興を積み重ねて曲にする。結果的には残らない無数の音がある。4月29日、友達のアリスが電撃結婚した。パーティで挨拶。飯倉ラフォーレ・ミュージアムでモリサ・フェンリイのパフォーマンスを観る。楽屋で挨拶。4月30日、家でボーツ。5月1日、音響、ソロ、録音。モリサがスタジオに来る。来年のパフォーマンスの為に音楽を作る事を頼まれる。即答できない。5月2日、音響、AKKOのCMのアレンジ。5

音。尚美学園ホールでシムボジウム。悠治さん、三宅さんも一緒。性に合わない事を頼まれて、非常にアガってしまった。汗ばっかりかいた。悠治さんはカッコ良かった。落ち込むよ。5月13日、ラフォーレのモッズでカット。明治神宮、フランス国営放送の特番の撮影、雨の中で。明治神宮の後、新橋駅へ。疲れが始まる。5月14日、音響、ソロ。スタジオにカメラが入り録画。今週一週間はカメラがついて回る。10時までやってクタクタ。5月15日、青山ヴィクターのカッティング・ルームで「オーエス・オーエス」のカッティング。音響、ソロ、録音。が、ほとんど録音にはならない、もちろん撮影の為。今日、「長電話」の発売日。宣伝もやったし、それなりに売れてくれるダロー。5月16日、朝6時、パルコの3m四方の壁に「長電話」の表紙、裏表紙を貼り始める。カメラマンの三浦憲治、デザイナーの奥村さん、本々堂

月3日、池袋西武のGORO展でご挨拶。そういえば世の中連休。僕には関係ない。子供達は朝から江ノ島に行った。真赤な顔してる。5月1日で美雨は4才になっている。僕が4才の時は？ 憶えていない。5月4日、音響、ソロ。ピテカントロプスにミカドを観に行く。5月5、6日、OFF。予感している事は現実化するし、感じていることは素早くやらねば、と思う。5月7日、音響、ソロ、録音。NHKで「サン・スト」の録音。月の始めはシブ・リクと違って渋いリクエスト曲をかける。渋いとは、まあ他のプログラムであまりかからない曲だな。5月8日、目黒のパイオニア・スタジオで「音楽夜話」の録音。AKKOの「オーエス・オーエス」の宣伝。銀座東急ホテル、朝日新聞のホット・ヴォイス取材。「長電話」の宣伝。音響、ソロ、録音。ウーム、最近毎日日記を書けなくなった。気持ちが言葉にいかない時

の義江さん、アシスタントの富永君等。途中、休んだり、AKKOの作った弁当を食べたりして、完成したのは12時過ぎ。雨が降り出した。1時間ぐらいのビデオにするつもり。音響、ソロ、録音。が、録音にならない。疲れた。5月17日、西麻布のシリンドで撮影。インタヴュー。夜、パルコに壁を見に行く。雨で無残な姿。写真を撮っていたら、悠治さんに肩を叩かれる。三宅さんも一緒に記念撮影、フッフ。

坂本龍一

家族・友人日々の糧

四月一七日 美恵さんと『ノスタルジア』を観た。雨だの霧だの温泉だのと次々と水、水、なので、終ってトイレにかけこんだ。その足で平野公子さん宅へ、この一週間自宅でいろんな服や陶器など展示即売。試着をしながら、公子さんの服は、何て私に似合うんだろうと自画自賛、でもホントに着心地よくてデブの私によく似合う。

夜、甲賀さんが友人の中野さんという人と飲んでいるところへ参加させてもらって、結局夜中の二時、中野さんて面白かったネと美恵さんと話す。

四月一八日 仕事で国民文化会議の山部芳秀さん、山住正巳さんと。そのあと『海盗り』の試写、親友の山川みづほ、清水能親氏と入口でバツタリ。中でこれまた親友の中井由紀子、佐々木ゆう子さんと。映画の中ですごく面白い会話があったから、アツハハと笑

うと後にいた高木仁三郎さんも笑った。私のとこだけ笑って、思わずみんながこつちを見る、笑いについてみんなどうしてこう臆病なんだろう。この日もまた飲んだ。一緒にいた画伯と呼ばれる貝原浩氏が、子宮の話をしていたら地球ととり違えた。子宮は地球だ、ホントそうです。

四月一九日 仕事で高橋悠治氏宅へ。台所のプリマドンナ美恵さんは降ってきた雨をみつめ洗濯物のことを考えている。あれこれと鬼才に教えを乞うているとたちまち昼、ついでに昼食をいただき、酒など飲んだら、職場に帰れなくなった。エーイ、半休だ!!

四月二一日 山川さんと妹の幸子と再び平野さんとこへ。品文社の原さんと子息に会う。面白い子で、私笑いすぎ。夜、下北沢で映画『薩摩盲僧琵琶』を、終って山川、清水、現代書館の村井、菊池両氏、貝原画伯、村岡小の名取氏などなど、飲んで、さわいで一二時過

ぎ頃妹と家へ着くと、夫の岡がまだ起きて将棋などしている。家で三人で宴会すつかり盛り上がり、あまりにはしゃいだので、ひさしぶりにはいた。

四月二四日 きょうは本当に忙しかった。朝職場へ出て、半休をとり池袋で所用をすませ、三時からのPTAの役員会というのに出て、学童クラブ、保育園と二人の子どもをひろって、夕食の仕度をして、六時半に新宿のモツサンへ。相手は来ていない、イライラ待っているモツサンの昭ちゃん、今月でモツサンは終りで、高島さんと新しい店開きます。ポトルはそつちへ持っていけますのでと、安心した。そこへ、私ね、恋をしていてスキップしている感じなのと、台風のように新井ひふみ嬢がやってきた。今月はこの私にインタビュアーが二つあって、この日はその一つ。もう一つは一六日にあった『私たちの就職手帳』女子大生の就職ガイド誌、今日はひふみが編集バイ

トをしているものなんだって。私のように真面目な働く母、働く妻、働く女

ってのは、あまりに真面目で取材しにくいのではないかと思うが、どうだろう。この年になると、やさしくにこやかに未知の人と応対ができて、自己嫌

悪の素を自分でふりまいてる感じが。『手帳』の方はひふみが鬼の編集長で取材には立教大の木戸さんがきた。見事に『女子大生』のイメージを体現したような人で、私は興味しんしん。ど

うしてみんなそうなの？ 大学の門をくぐった時は同じになりたくないと思っただけ、同じにならないとだんだん不安になるの。うーんなるほど、

一本一草天皇制とはよく言ったもんだ。ひふみとは結局、インタビュアーは早にきりあげ、中国の話や、男や女の話など二人でしゃべりまくった時間は六時間余、ふと気がつくとき夜の二時を回っていた。ひふみは今年早稲田を休学して国費の留学生として中国に二

年行くんだって!

四月二五日 江崎さんに会う。通称グニコちゃん、彼女たち三人で作った本『女の子と男の子の本』出来たので見せてもらう。なかなか面白いので、紹介できるところでやってみよう。

四月二六日 仕事で林光さんと、渋谷のフランセ、たそがれていく渋谷の町をみていたらビールが飲みたくなつた。光さんはNHK放送センターへ。

四月二七日 中井さんに同時代の原稿手渡す、元気がない私に輪をかけて元気がない、同居の戸田徹氏の具合がいま一つのこと。

四月二八日 朝九時の新幹線で岡山へ出張、列車の中でよく寝られるよう昨日はあまり寝なかつたら、座席がない。身体の具合もよくないので、エーイ、グリーンで行ってやれと車掌室へ飛びこんだ。国労バツチの車掌さん、一人? と聞いてじゃと普通席へ、何と空いてる席があったのだ、幸運。

会議が終って、駅前の高島屋で、きび団子、おかずなど買い四時半の東京行へ。ビール、ウイスキーを飲み、すっかり酔ってしまった。

四月三〇日 恐怖のGW、豊島園にスカイパイルーツというすごい海賊船が出来たとかで町内会が招待をうけた。乗り物三つタダって言ってもネー。

五月三日 晴れやかなメーデーを失礼したからずつと二九日から休んでいる。もう豊島園はやだと思つたが、行くところないんだ。家族パスというのを作ってルンルン。昼頃、浩太郎がいな。迷子のとこへ行ったり、探し回って四時、仕方なく岡を残して家へ帰る。胸が高くなって不安がつる。そこへ、あつお母ちゃん帰ってたの。事情を聞くと一人で乗り物を楽しみ自転車友人のとこへ行つてたんだと。この五才の息子、ホントに世話かけるネー。

志沢小夜子

料理がすべて

5月8日から19日まで、フィリピンに出かけた。ネグロス島のバコロドとルソン島のバギオまで、日程の割にはいそがしかった。

〈今月の外食〉「ナントカ・フアクトリー」(ネグロス・バコロド)チキン照焼、生ガキ、バルト。総勢約二〇人。ぼくの食べ分、27ペソ(約四百四十五円)。「店名忘却」(同前)ヤキメシ、豆と肉の煮たもの、豚のレバーとジャガイモのカレー煮。総勢15人。ぼくの分、23・5ペソ(三百八十七円)。「KAWA etc」(同前)魚のスープ、魚の甘酢あんかけ、エビ天、生エビのマリネ、小型のハルマキ、焼ソバ総勢30人の打上げ。およばれ。「ナントカ・フアクトリー」(同前)チキン照焼、生ガキ。総勢12人。ぼくの分20ペソ(三百三十円)。「シム・シム」(ル

ソン・マニラ)ポーク・カレー煮、ワンタンメン、カラマンシー・ジュース、総勢4人。ぼくの分29・9ペソ(四百九十五円)。「店名忘却」(ルソン・バギオ)ベーコン・サンド、コーラ13・5ペソ(二百二十二円)。「南国麵家」(ルソン・バギオ)牛肉ガユ、12ペソ(百六十八円)。「マニラ空港レストラン」(ルソン・マニラ)イワクイイガタイ・スパゲティ、鳥ソバ、コーヒ128ペソ(三百五十二円)

日程の割に外食が少ないのは、およばれや、弁当の暮しが結構あったから。〈今月のおよばれ〉①バコロドでは、かつおぶし会社の社長の家へ日本人の男4人とペタの1人が泊らせてもらい毎朝豪華な食事。ベーコン、スクラブル・エッグ、焼魚、マンゴーなどなど。当家の主人の話。工場はミンダナオのザンボアンガにあり、取引先は日本。毎年一、二度は焼津を中心にしかける。ただし、このところケズリ節の

需要はどんどん減る。「日本の若い人がカツオブシを食べなくなった」②5月9日の夕方から、バコロドから車で一時間モルシャヤ地区の砂糖きびのプランテーション、カルメン・ハシエンダを訪問。オルガナイザーたちの村落で夕食と次の日の朝食をご馳走になるといっても、どちらも同じメニュー。魚の干物、豆の煮たもの、米。総勢15人。ハシもスプーンもいっさい使わずすべて手。皿はひとり一枚。家は床の高い南方型の竹と木の作り。どの家も何もない、に等しく、組まれた木の壁から裏がすいて見えるほど。古いラジオが一台だけあった。年中温かいので布団の類もなく、明け方誰かが寒くて目覚めた。③5月17日、暑さにまいて訪れたルソン島の山中バギオで、組合運動や、選挙ポイコットのオルグをしている女性。ペラ・ヴィザーさんの家で夕食をご馳走になる。カニとコーンのスープ、自家製ソーセージ、魚の

甘酢アンカケ、マンゴー、米。

〈今月の発見〉日本で野菜や肉類の味が「なくなり」つつあると思っていたがフィリピンでその事はいっそうはつきりした。かなり食べたトリについていえば、明らかに日本のトリはブロイラーで、ブヨブヨに肥り、味が無い。野菜の多くも、温室で季節に無縁に作られ、匂いも味も変質してしまっている。フィリピンでは、社長の家の庭にも、砂糖キビ畑の労働者の家のまわりにも、等しくニワトリが放し飼いにされ、ヒヨコ、ヒナ、成鳥と各段階のニワトリがいた。そんなことは、あたり前田のクラッカー」なのだが、日本ではもうめったに見られない。北海道中川郡のはずれでも出会えなかった。〈今月の不思議〉①バルト。考えようによっては実に不気味なゆで卵。つまり、ふ化寸前の卵をゆでてある。くちばしや軟骨がある。味は当然トリの味。生卵が普通1コ7ペソであるのに、

これは約三倍の値段。②コーヒ。フィリピンでコーヒといえ、ほとんどのインスタント。それもインスタントで出しているのではなく、注文するとカップに白湯が入って出て来て、それにコーヒ、ミルク、砂糖などが袋に入ったものがついて来る。普通は3・3・5ペソ(約五〇円)。空港のロビーでは、それが倍もした! もっともコーヒの木がないわけではなく、バコロドや、バギオではそれをネイティブ・コーヒと呼ぶ。先出のバギオのパエラさんの家の裏にも数本のコーヒの木があり、そこからとれた実を集めて選別していた。

〈今月の弁当〉5月11日、13日まではバコロドの大学の構内でワークシヨップをやっていたので、昼、夕食共に支給された。もっとも弁当といっても、ご飯をビニール袋に入れたもの、とおかず(日によって、野菜のごった煮、豆とポークの煮たもの、煮魚、とそれ

ぞれ違ったが)をこれまたビニール袋に入れたものを各1コ受け取り、皿一枚、スプーン、フォークで食べる。一度だけ、鶏ガラと野菜を煮たものがひと鍋来たことがあって、豪華! と驚いた。

〈今月の市場〉フィリピンの市場の野菜類は、日本と共通するものが多い。キヤベツ、白菜、ジャガイモ、ナス、トマト、タマネギ、シヨウガ(これが少し高い)、ニンニク。それに多くの果物。マンゴーを中心に、生のナツメ、パイヤ、バナナ(もちろん、日本で見ると今度の発育過多の日本人みたくなバナナでないヤツ)、パイナップル、カラマンシー(四国のスダチに似た酸っぱく青い果実)。魚はほとんど干物。イワシ、アジのほかに丸葉つばに似た魚など。総じて塩が強い。肉はほとんど売っていない。トリも珍しい。

田川律

特別休暇

—東大病院産婦人科病棟入院日記—

2月8日 下腹が張り肩がこる。オカシイと感じてひと月。重い心で東大病院の婦人科を訪れる。以前近くに住んでいて、安さにひかれて二度ほどここで出産をしていたからである。卵巣嚢腫と診断される。要手術。うわあ、大変だあー、でもキラッと一筋ひかる気分。3人の未就学児を抱えた半幽閉生活から一時解放され、しかも悲劇のヒロイン(?)になる大義名分がたつかもしれない、などと不謹慎なことを考えているのだ。

外来で偶然診てくれた医師が、私と同世代で、安田講堂から15年ですかあなんて話が進むにつれ、共通の知人の名前さえとび出し、遠慮、気後れの壁が一気に吹き飛んだのは好運だった。何

患者一人に三人の医師がつく。34才、30才、25才くらいのコンビで、執刀にはさらに教授、助教格の医師が加わり指揮をとっていた。(これも説明があるわけではない。実際、手術前日のオペ診まで執刀医は決まらなかった。) 続く土、日曜は全くすることがない。散歩がてら赤門前の本屋でマンガを買って読む。差し入れのレゲエのテープを聴く。(何だか場にそぐわない。)文字通りの特別休暇である。病室は四人部屋で、私以外は術後の人ばかり。いろいろ情報をし入れる。(これは意外と貴重で役に立つことが多い。)

2月28日 いよいよ手術。前日から食事量の激減と下剤でフラ〜する身体に注射一本うたれて、意識もうすばんやりしているうちに手術台の上だ。前夜説明にやってきた麻酔医に、喉に管を入れるのはイヤ、悪夢をみる薬はイヤと、さんざん注文をつけた結果、ほぼ注文どおりの処置になる。でも背

でも質問、何でも注文、という態度で最後まで貫き通せたのはこの医師との出逢いがきっかけだったと思えるからだ。でもやはり心配で、書店の医学書コーナーへ直行。「女の立場から医療を問う」(中村智子著)など買いこむ。生憎、子宮筋腫がメインテーマで卵巣嚢腫はあまり登場しない。富士見病院問題にも触れ、東大の態度が批判されている。一層不安がつる。

とにかく大病院という所は、患者をモノみたいに扱うので覚悟が必要だ。第一に、研究対象なのだから。モノと言えば、例の内診用の診察台。うす汚れた(目が汚してしまうのだ)カーテンで身体をまっぴたつに切断される既含まがいの囲いの中で、しきりに藤本和子さんの「砂漠の教室」のくだりが頭に浮かぶ。アイツら何をするのかわからないゾ。ゴム手袋と闇の世界。

不要なモノは取ってあげます式の手術は自粛しているのか、こちらが問う

中に針が入らなくて何度もやり直しているうちに、ぞろぞろと一見して学生とわかる一群が見学に入ってきた光景は奇妙に良く憶えている。

凍った鉛の湖を下腹にかかえて目が醒めてからは全て他人まかせの身体だ。この職場20余年というヌシのような付添いのおばさん。結局、卵巣嚢腫ではなく偽嚢胞とかいうモノで卵巣その他に異常はなく、メデタシ〜とゆきたい所だが、何故そんなものができたか再発するのか、全然ワカラナイ。体から管をぶら下げて、痛みと熱でうなりながら数日、寝返りをうつ。術後5日で半抜糸、7日で抜糸と幸い順調に恢復に向った。

3月10日 雪のなかを退院。

《回想場面、その1》

病棟医長回診。ぞろぞろと白衣の群れ。私の傷を指差し、何だこれは? こんな上等な糸をここに使うのはもったいない! 縫合した若い医師は赤面

前に「健康な組織は極力残すようにします。」とその同世代医師が言うので、手術することにしたが、執刀するのは別の医師と聞く。「責任あるちゃんとした医師がやりますから」と言われても、顔さえ知らない人間にどうやって信頼をよせることができるだろう。密室性の高い制度そのものが信用できないのに「心配いりません」と言われても不安は消えるわけがない。思いあまつて、前夜に出てくる賛育会病院の女医を訪ね、第二の意見を求めたりもしたのだ。

2月24日 入院。慌しく検査。診察。病棟内の診察台のカーテンの向うで、名も顔も知らぬ医師たちによる診察。一言の自己紹介があるわけでもない。人と人の付き合いの最低限の礼儀の欠如。ムカツとする。後で病室にやって来て、担当医ですと名告った時、「あつ、先程は下半身からのお付き合いで……」と皮肉まじりに言ったことばの真意が伝わったかどうか。担当医と言っても

その頭を先輩格の医師が、それみたことかとこづく。患者さんの前でですよ、とどこからか声。説明にとり繕う医長。苦笑。

《回想場面、その2》

同じく病棟医長回診。四人部屋にひとり。空のベッドを眺め、やおら私に向って、退院したら近所の人に東大病院に来るよう言っして下さい。真顔である。あつ氣に取られた医師群に向い、何ごともコマージュナルですからね。シーン。シラケタ雰囲気が流れると、患者の症状も聴かずに皆行ってしまった。残された身はさらにシラケル。

くぼたのぞみ

たのしみがない

4月17日 美恵と別れるゆめ。ののしりあったすえ、あんななかひとりうちさがしもできないんでしよう、といわれる。夜はひとり酒。

4月18日 美恵が津野海太郎をつれてかえってきた。また酒。

4月19日 朝、志沢小夜子が出て合せ。昼にはのみだして気がつくとなっていた。

4月22日 アート・アンサンブル・オブ・シカゴのコンサート。当日券は二階の最後列。前半はねてしまった。

4月26日 マリー・シェイファアの映画と講演。音風景とは自然との調和というより、自分の設計した音で自然をみたしたい、というようにきこえる。夜通しの儀式を作曲したはなしで、きき手がつかれてくるのにつけてこんで操作できるからドラッグとおなじだ、というのであきれる。

しゃべって終る。演奏は榛名と、二人の曲に坂本龍一の二曲。シンセサイザーで失敗したので、トイピアノとハルモニウムにもどる。ピアノ一台を中心に補助楽器を二人でつかうかたちをためてみる。ピアノを立ったまままでひくスタイルをかかんがえる。

榛名の「鉄道唱歌ビッグ変奏曲」を近くから見たのが、いちばんおもしろかった。足で拍子からはずれたリズムをとりながら、この汽車はどこまでも脱線してゆくのがあった。

5月13日 横浜こども科学館でクセナキスのUPICシステムを見る。波形やエンベロープを磁気ボールペンで入力したあと、できた波の一部を切りとってアコーディオンのように圧縮してしまふやりかたで、あたらしい音色をつくっている。

パリにもどってくれば、しごとはいくらでもあるのに、とコーネリアにいわれる。

5月1日 朝、葉弥が仮病。家庭科でつくるみそ汁にねぎがはいるので、試食のときにたべられないのだが、そういえないから休む、という。先週からの計画だったらしい。頭痛といっているのを、どなりつけて追いだすと、元気になるいっていった。

5月3日 窪田さんによばれて、韓国政治犯のつくった歌の訳詞とコードをつけて、夕ごはんをたべさせてもらう。その近所のプランBで、夜はピアノ演奏。有料入場者が53人いたので、入場料から経費をひいたのこりを主催者と折半(58400-19500)/2=19450円 三宅榛名の変奏曲の変奏曲を即興しようとして失敗し、帰り道に作者におこられる。

5月4日 榛名にでんわしたら、ちようど「長電話」で話題にされたところをよんでいて、いつものことだがけんきよさがたりないね、といわれる。

5月6日 買ったばかりのシンセサ

5月14日 ジアンジアンで「現代音楽は私」。西沢幸彦がゲストだし、水牛関係者が一列とっている。満員。立見客多数。

短い曲のメドレー。この何日かで数曲つくったはずだ。それぞれにおかしな方向をむいている。バスフルートとヤンチンが意外とピアノにあっている。榛名のこういう曲をきいていると、だんだん自分で作曲する気がなくなってくる。必要がないみたいだ。

5月16日 坂本龍一をスタジオにたずねる。キカイにかこまれたスタジオ生活。フェアライトの説明をもらう。CRTを見ているうちに目がいたくなる。エンベロープの速度がキーボードの音域と連動しているのがよくない。低い音はのろのろ、高い音はあつという間。サンプリングの一部を切りとってくりかえすことで持続性をもたせるやりかたは、クセナキスがUPIC以前に確率波から規則性をつくりだ

イザーを練習につかってみたが、ぜんぜん気にいらぬ。買う前は毎日カタログを朝から晩までながめくらししたが、買ったたらちまちま熱がさめた。生活費がたりなくなつた。

5月7日 ブレーズの「エクラ・ミルティプル」の練習4時間。指揮は指で合図をおくるのに、だす指の数をまちがえてしまう。つかれた。

5月9日 ブレーズの練習のあと「長電話」出版記念会食。浅田彰と糸井重里にはじめてあった。

5月11日 ヴァリオ・ホールのこけら落してブレーズの「エクラ・ミルティプル」を指揮する。はじまってすぐ、あわなくなつて中断し、やりなおし。お客は音楽ジャーナリストなど約二百人。

5月12日 おなじホールで演奏つきシンボジウム。諸井誠、船山隆、三宅榛名、坂本龍一、矢野賜と。討論は、いつものことだが、それぞれかつてに

すのにつかっていた。フェアライトではなぜか、これがトレモロ風の不連続音になってしまふ。現実音をデジタルで再構成したり、変形するメカニズムはなかなかいい。

坂本龍一は、音色にいちばん興味がある、といっていた。キカイを操作しながら音色をつくりだすスタジオ飛行のパイロットが。

高橋悠治

行ったり来たり

四月十五日 早朝、つれあいがいンドネシアへ写真取材に出かける。二月のパラオ行につづいて今回も又、しばらくは主夫業に専念せねばならぬ。朝八時に起床、わが息子の為に食事づくり。そして、九時には保育園へ。夕方五時半には迎えに行かなければならぬので日中の動きには神経を使う。最近はやく逆の立場、つまり不自由さが解ってきた。それにしても今は、これまで我輩ばかりが東南アジアに出かけていた分をまとめて返して貰っているようだ。まあしつかり頑張っ下さい。

四月二十五日 近所に住んでいる八王子中央診療所所長の山田真さんの長女で小学五年生になったばかりの涼の遠足に同行する。涼は半身マヒの女の子で、世の中の的には「障害」児と呼ば

れるが、地域の小学校に通っている。涼と私のつき合いは、彼女が三才になったばかりの頃だから、もうかれこれ八年になる。共同保育所「にんじん」は涼のためにつくられたといつてもいい。そして、周囲の大人や子供の関わりも彼女の存在を抜きに語れない。

鉄棒の手摺りを使って歩く練習をしていた頃が妙に懐しいが、共同保育をする中で、「健常」児と追っかけたり追っかけられたりする内、彼女はいつの間にか自力で歩き始めた。「障害」児には特別の訓練を、と行政は「教育」の名を借りて「養護学校義務制」を施行したが、遊んだり、食べたり、勉強したりする生活そのものが訓練になるのだという事を私は涼から学んだ。

今日、彼女の遠足に同行したのは、親が介護しなければ遠足にも行かせられないという学校側の都合に依る。車を運転出来る、母親の小児科医・梅村浄さんが同行出来ない故、私がボラン

ティアを買って出た訳だ。しかし、なぜ親の手を借りずに、クラスの仲間や先生たちの手で一緒に彼女を連れて行けないのかと思う。何か事故が起ったら責任が持てないからとの理由で、プールにも入れぬ、運動会や遠足にも参加出来ぬと言う状況に普通学級の「障害」児は現在ある。学校っていったい何だろう。

四月二十七日 新座市教育委員会に息子と共に出向く。中学校入学を控えた普通学級に通う「障害」児が、親に知らされることもなく一方的に「養護学校」へ措置された「事件」をめぐる「よろず屋」の構成メンバー十数人が、真相を確かめるため教委に押しかけたのに合流する。教委側は措置した校長との連絡ミスを主張。つまり、教委は「障害」児を「養護学校」へ行かせるよう指導はしていない。責任は校長にある——なのだ。同席したあるひとりの母親は「子供の就学通知が来

ないので教委に電話したら、取りに来ればあげますよと簡単に言われた。子供に「障害」があるから通知が来ないのか、国籍が違うから来ないのか、いろいろ悩んだ。そんな親の気持を教委は「どう考えてるんですか。」と、教育長に切々と訴えていた。その間、わが息子はふたりを仕切るテーブルの上で寝をべっていた。今年彼の「就学時健診」の年でもある。親の意志は勿論、「拒否」。

帰宅したら、つれあいがいンドネシアの旅から帰っていた。お疲れさん。四月三十日 再生不良性貧血症で六才半の命を断たれた女の子の八ミリフィルムを毛利蔵人氏と一緒に観る。

やはり辛い。毛利さんの弾くピアノ曲に覆われた美しい「鎮魂」のフィルムにして両親に捧げようと決心した。四月二十九日 絵本原画展が成功したからという訳ではないが、「にんじん」共同保育所・文庫が十部屋もある

一軒屋に引越をする。これ迄は、たった三部屋の中に十数人の大人と子供がワイワイしていたのだから夢のようだとはいえ、経済的運営には相変らずの厳しさがつきまとう。

五月二日 三鷹たべもの村「村の教室」の企画会議。たべもの村はその名の通り「食べ物」のことや原発、環境問題に取組む女の人たちが、自前の場を持ちたいとして創った、いわば、「食堂・喫茶・居酒屋」。「村の教室」は隔週土曜日の夜に開かれ、スライドあり、映画あり、レポートあり、とに角酒を飲みながら賑やかにやっています。連絡先・〇四二二・四九・四七八九。

五月三日 幼な友達が我家に来る。人は大喜び。飢えていたんだねえ……五月十日 キヤメラマンの一之瀬正史と、いま撮りたい記録映画の構想について話す。テーマは「学校・地域・子供たち」。鎌田さんが著書「教育工場

の子供たち」の中で述べられているように、いまの学校はおしなべて「工場」施設「化している。こころ辺りを映像でルポしたいと思っている。

五月十三日 志木市民会館で灰谷健次郎講演会。主催は実行委方式だが、実質は「よろず屋」に集う連中が中心になっている。我輩はビデオ記録班。つれあいが写真記録。夫婦そろって新座の人たちの営みに関わっていることになる。夜、灰谷さんとの交流会を終えた後、皆で撮ったビデオを再生してみる。メンバーの各々が登場する度に拍手、ひやかしの歓声に包まれる。

ビデオは撮影現場に現像所がくっついているようなもの、こうしてすぐ再生して見れるのがなんともいい。最近になってようやくビデオの生かし方が解ってきたような気がする。そうそう講演会場は通路に座り込んだ人、立見まで合せて千人。灰谷さんの人気を改めて実感。皆よく頑張ったね——。



雨の日、黄色い買物カゴをさげて出かけて、気がついた。あ、全身黄色づくめになってしまった。

小学校が近いので、家の回りは下校時には子供たちが道いっぱいになる。道で行き会う子供たちは、子供だと思っから遠慮なくじろじろ見させてもらう。くりくりしたおしりにジーンズの小さな半ズボンなんかはいて、茶色のよく焼けたすらりとした足の子などみかけると、あんまりきれいな足なのですっかり見とれてしまいながら、だいじょうぶかなあ、あんなきれいな足をおんなに出してと、ほんとはよけいな心配をしよう。

ところで子供たちの方は、道で会うどんな大人たちを気にするのか？

小学校の裏の道で、高学年の三人組が、なんかぐにゅぐにゅニタニタ歩いて来るのに会った。すれ違ったとたん、聞こえた。

「ははは……黄色いカサに黄色いレインコートに黄色い長グツッ！」

ほら、子供の方だつて負けてはいない。

ブタ草雲にのる

きょう、のんちゃんと遊んだ。夕方、山下公園に行つて、円盤みたいなベンチの上をとんだりはねたりした。そばで、ピラピラのスカートの子たちと皮ジャンギンギンの男の子たちが、「君はファンキーモンキーベイビーズ」に乗って腰をふりふりさせていた。少し振りにああいうのを見たね、とのんちゃん二人で見つめていた。でも、原宿なんかと違うのは、あの子たちの向こう側が海だということ。昼間はいろんなものがプカプカ浮いてて変な海だけど、夕暮れは違う。ロックなリズムに浮かれながら、あたしとのんちゃんは、あの子たちと一緒に海に溶け込んでしまいたい気分になった。ところが現実には厳しい。私たち二人が何となくそばを通りかかると、「おぼん」という鋭い視線が私たちに注がれたのを

けて、極めつけ、ケンタッキーフライドチキンの食べ残しの骨を鼻の下にのせたり口につつかえ棒をしたり……あたしたちは、夜通しのーてんきだった。のんちゃんは、インコの目や大川栄策のマネがうまい。あつ、私の郵便局マークをみせてあげるのを忘れちゃったよ。

今度の私のやるお芝居は仮面劇です。別に木馬座でもサーカスでもないんだけれど、みんなお面をかぶってお芝居することになってるんだ。普通役者さんは顔を出したままで、にらみつけたり笑ったり泣いたりして熱演するけれど、私たちのはちよつと違う。顔はスッポリお面で包まれてしまうから、私がいくらにらんでもお客さんはちよつとも恐がらないし、どんなにたくさん涙を流しても誰も気づかないね。目立ちたがり屋で、『お顔♥命』の私は、ちよつと寂しいんだ。

でも、もしかしたら、今日ののんちゃん

私は見逃さなかった。

もう遅いので『永川丸』もおしまいで入れなかった。せつかくセーラーカラーのシャツに赤い靴で、水兵さんる気取ろうと思ってきたのになあ。残念。それにしても、去年の四月のはじめにみんなで鎌倉の海でパシヤパシヤしたときより、今日の山下公園の海は冷たそうだったなあ。今年はずいぶん寒いや。

あつちこつちのベンチに寄りそう若いカップルのところへ駆けよつていって、「すいません、週刊女性ですけど、あなたたち今、どんな気分？ 幸せ？」なんてインタビュしたらおもしろいだろうね……と言つたりしながら、ヘラヘラこんやく歩き私たちだった。出店のとうもろこし・四百円を食べながら、元町の方に向かって歩いた。途中で新品の歩道橋らしきものを見つけたので、夢中で駆け上つた。石とかレングとかでできていて素敵なんだ。手すりから足を外側につき出してブラブ

んとあたしがお面をつけていたら、山下公園であの子たちと一緒に君はファンキーモンキーベイビーズって踊れたかもしれない。そうしたら、海ももつと暖かかったかもしれない。この頃あたしのお顔はどんどんあたしに反抗的になってきた。このままだと全身がうそつき病に犯されてしまう。イ・ヤ・ダ。

お面をつけた私が舞台上で舞う。すると、いろんなお客さんがあたしのお面にいろんな顔を描いてくれる……といいな。そのいろんなお顔が舞台の上にくろがたりぶらさがつたりはりついたりして、そのまわりを、溶け出したあたしが光になったり音になったりして駆けめぐるでしょ。じつとしていられなくなつたお客さんたちもみんな人のお面に顔かいたり、洋服の裾ちぎつちやつたり髪の毛刺つたり、動物になつたりジェット機になつたり、ほら大地震が起るかもしれない。私はそんなお祭りみたいな大災害の中でなら、

ラさせながら、遠くに行つちやつた恋人の話とかした。ちよつと寒かった。下を見ると公園があつた。こんなところで野外劇とかやりたいねーなんて。のんちゃんは、あたしの10倍くらいの時間をかけてとうもろこしを食べた。

横浜は、疲れているときに、とてもやさしくて静かな都会だと私は思っています。

昔、のんちゃんと一緒に芝居をやつたとき、螢光色のピンクやきみどりのポスターをぶらさげて、地下鉄の中や原宿の歩行者天国をのし歩いた——上野の花見客に混じつて、虫の浮いた紙コップのぬるいビールを飲みほし、『DOLL』になつて踊つちやつた——あの時も、あの時もあたしたちは溶けそうだった。

それから、如月のおぼさんちで會長ごっこをした時、楽しかつたなあ。顔中化粧して、頭や首に羽根や真珠をつ

地割れに落ちてはさまれて死んでも恐くないかもしれない……などと思えたりもします。

今日も、赤い靴をはいたブタ草は、異人さんに連れて行かれはしなかつたけれども、のんちゃんの雲にのつてしばし夢をみました。きっと明日の目覚めは最高でしょう。そして『おはよう』とあなたに駆け寄る私は、また一つ若がえっているかもしれない。

竹内晶子

てがみ

前略お許し下さい。

大変に長い間御無沙汰致しました。

「水牛通信」の毎号の贈呈、有難うございます。毎度礼状を忘れていたことを何卒お赦し下さい。申しわけございません。

四月号は5月1日に戴きました。「水牛通信」の売れ行きもよいとのこと、お慶び申し上げます。

昨年12月号の古屋能子さんの追悼特集はすばらしい読物でした。同じ人間でありながら、古屋さんと自分はどうしてこのように大違いなのかと、僅か九才早生れの古屋さんについて考え込みました。借越ですが、私も御冥福を祈っております。

11月号のカラワン特集も興味ある号でした。タイ人の民族性が匂い立ってくるような感じてました。八巻さんの同

号の中の「カラワン楽団の日本日記」

は印象深いものでしたが、八巻さんが20年ほど前迄松本市にお暮らしだったと知り、なつかしい思いに包まれました。八巻さんもあの白っぽい夏の高原の町の風景を眺めた体験がおりなのですね。私は松本生れで、敗戦の6日前から四年間余、16才より20才迄、松本で過しております。その後、26才から3年間、一九五五年より五八年迄、やはり松本市に合計一年近く暮らしております。一九七六年2月初め、18年ぶりに松本市を訪れて、あまりの変貌ぶりにとても驚きました。あれから、もう8年以上です。初めて「水牛通信」を郵送して戴いてからあと2カ月ほどで4年となります。当時、新聞ニュースだったOAも「OA職業病」が言われ始めて久しくなります。社会は光速より速く変わっているのでしょうか。昨年の「水牛通信」で深い感銘を受けた藤本和子さんの御本「塩を食う女

たち」を一週間前よりくり返しくり返

し拝読しております。QC（救援連絡センター）の田中美恵子さんが差し入れて下さったのですが、それまでは、藤本さんがこのようなすぐれた作家、というより、叙事詩人であるとは知りませんでした。葬儀社のオービー夫人の章は幾度読み返しても新鮮な印象を受けます。そして他の章からは、人間について多くの事実を教えられております。10-30、82の初版で、私が戴いたのは、7-10、83の第三刷ですから、やはり、読者は正直だということでしょうか。

最近、改めて「文は人なり」を思い知らされております。そして、環境こそ、その「人」を作るということも。丁度、四年前に府中刊八王子拘置支所から、東拘へ移されたのですが、八拘が屠殺場に思われるほど東拘は人道的処遇でした。東拘での3年6カ月の間、筆読に徹夜して、白み始めてくる

空を眺めて何かしら得体の知れない感動に包まれた体験は珍らしくありませんでしたが、やはり益々非人道化しつつある法務省の行刑方針のため、七転八倒して苦しみました。そのため、時には、読み返しますと、恥ずかしさで下痢が生じるような文章の手紙を書いております。確か八巻さん宛にも一通そんな手紙を差し上げております。

昨年10月31日、府中刑拘置区に移されましたが、私が東拘で苦しんだのは心がけが悪かった(?)からだといわりました。私は愚かにも、にほん国であるのに、人間的な被告人生活を求めておりました。それでは苦しむ筈です。

5月7日付朝日新聞の夕刊(P.3)は、アメリカは連邦法で刑事被告人の食事衣服費用の一人一日当りは636.06と報じております。\$114,330として、8436円で、これはわが国の七百倍以下の12倍以上です。これでは、にほんは経済・文化超大国とは言えないような

気がします。しかし、法務省の一見、生来性犯罪人学説を信じているような行刑、即ち囚人獄殺（獄殺と申しましたが）、未必の故意的な間接的緩慢病死化ですが）処遇行刑は、現在の如き多様化した価値観の下では非難され難く、国家経済則上、極めてすぐれた政策のようです。

府中刑拘置区に住んでおりますと、東拘が天国のように思えてなりません。自分の現金な性格に少し呆れております。実は、本年一月号か二月号の「水牛通信」で、意見や思想の表明ではなく、体験の叙述の原稿なり「水牛通信」に載せて戴けることもあると知り、当所の体験を日記風にまとめようと試みたことがあります。一カ月ほど努力したでしょうか。結局、著述不能の環境を、その環境の中で著すことの不可能であることを確認したに終わりました。こういう当りにさえ迂闊になるのは環境以外、私が受けたCL（チングレ

クトミー）の脱落症にも原因があるようです。肝心の本人の自覚がこのような有様ですから、私の一見達者な口頭による自己表現に接している看守達には、CL脱落症など空想もできないのは無理ないと思います。

CLされますと、文字にて表現するのは、甚だしい重労働となりますが、正しくは「CLされると、劣悪環境による文字書き能力の喪失が急速になる」というべきかも知れません。四年前の私は、今よりもかなり立派な文字を書いておりますから。ただ、何事にも、CL前のような行動力が消えたことは体臭の喪失と併せて、CL直後からの特徴です。

当所は私の終の棲家と決まりましたが、この廃人化処遇の中で、私が得た最大の体験は（自分はこれ迄二回も入所し《今回で三回目》今日迄、既決合計4年9カ月、未決計7年弱で、12年近い獄中生活を体験しているわけです

が)法務省の役人は上から下まで、無責任を極めており、自己の利益を前にしては、囚人は全く人間と看做さないという自明の事実です。生きて行く上でこの種の事実認識は大きなマイナスであることもわかりました。もつとも私の精神が弱いからであり、藤本さんが紹介していらつしやる黒人女性のような勁い精神でしたら、話しは全く違ふと思います。弱い精神とは、本状を書いていても、ひっきりなしに音を立てて行われる、好意の全く見られない監視によって、気が散り、何を書こうとしているのか、頭が混乱してしまうというようなことです。又、現実を直視せず、法文や法の理念、又は建前を前面に出して、官の違法性を非難するということも「非男性的」と表現できるかも知れません。事實は、単に私は疲れ切っているだけなのでしょうが。しかし、府中刑の獄中者を、便宜上物的に扱うという体質は是非廃止さ

せたいのです。こういう非人間的処遇では、被告人も既決囚も社会復帰能力を益々低めて行きます。この点のみはCLされて脆弱化した私の頭でも明確に確信しております。日々、接している看守達にうとまれ易い発言をするということは、堪え難い苦痛ですが、これは、今、私が発言していないと、この廃人処遇を正常であると看守自身信じ込んでしまい、累犯者養成は止どまるところを知らないことになると思われま

ります。自由刑の唯一の目的は、社会防衛のみに限るべきだとの見解が世界的な定説ですが、にはん国はその逆を歩いています。囚人の更生を真に求めるのは、社会経済則上不利であるとの考えから、一見、生来性犯罪人学説、いわゆる犯罪者に生れつき遺伝学的に決定しており、更生はあり得ないという妄想ですが、を信じている態度をとっているのが、法務省です。私の短期を含め

て10カ所近い施設の体験から、看守の労働量が大いさほど、処遇は劣悪となっておりま

す。当所の看守は極めて忙がしく、担当を例にとれば、東拘の5、6倍の労働量です。瑣末極まる規格を絶対命令の形で汚ない野犬を罵る態度で、行うというのは、看守自身人間扱いされていないためでもあります。府中刑は特に被收容者の反社会性(このことばの意味を理解できる看守は当所にはいないようです)を高めておりますが、こういうことが、裁判所で犯罪と認定されない限り、事態は解決しません。そして、現状の反動的な首都圏の裁判官では、絶望的です。

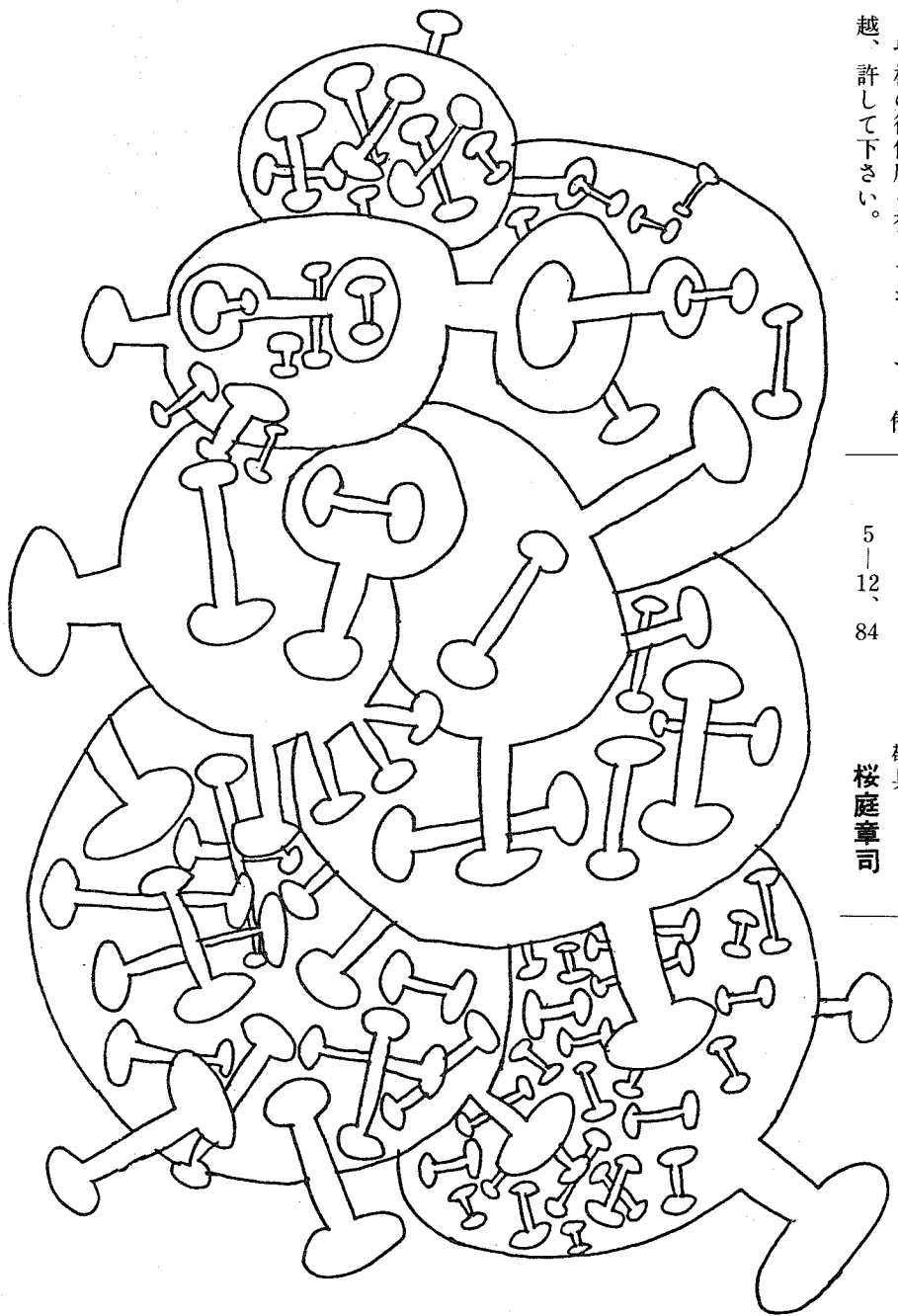
申しわけございません。二日かかりとなり、今日は5月12日です。土曜日で、午前中でのしめ切られますので、大変な乱筆となりました。実に下らぬ事柄を長々と乱筆にて書き、情けないことですが、このまま郵送致します。

乱筆、重ねてお詫び申し上げます。

皆様の御健康を祈っております。借越、許して下さい。

5-12、84

敬具
桜庭章司



ぼくが作った本

連休になる前に、さっさと仕事をかたずけて旅に出ようなどとは甘い考えだった。ちよつとのどがイガラッぽいなどおもつたら、休みに入るやいなや爆発した。熱が出た。おまけにぎつくり腰が再発して、四つんばいで、ゲボゲボやっている図は、もはやこれまでと思わせた。

●小日本主義。石橋湛山外交論集、増田弘編、草思社。巻頭の論文の日付は大正二年五月で、当然ながら、「吾輩は……」であり、巻末の論文は昭和四二年なので「私は……」となる、つまらないところで感心してやがると思うけど漢文調の初期の論文のほうが迫力もあるし国語の勉強にもなる。カバードザインはちよいと迫力不足だが。●ともだちは海のおい。工藤直子、長新太絵、理論社。先月も書いた理論

「苦ザラ」、少年マンガ誌でよく見るあのザラ紙を使って、ぶ厚いけど持つてみると意外と軽いという体裁。いまでもこだわっているけどこの本のタイトル、小説新潮があつての大コラムなんだから、小説新潮というロゴタイプにぶらさがつたように大コラムという看板をひっかける、そんなダメも作つたけど、いつしか体制は「大コラム」のひとり歩きとなる。はたしていかに●深夜酒場でフリーセッション。奥成達、桑原伸之絵、晶文社。内容はタイトル通り、桑原さんは奥成さんの友人ということで絵をお願いした。肥満した風せんみたいな人物が、ポカッと空に浮いて自重で地上10センチに静止した。といった案配の絵の人だが、今回は画風をかえたとかで、いまいちの感をいだけさせた、描き直してもらったのです。●インタヴューという仕事。スタッズ・ターケル、中山容他訳、晶文社。ま

社のシリーズの一冊、詩人の工藤さんによる、「くじら」といふかの、ある日あるとき」の記であり、たいくつするに「心がゆるんで」きて、「戸じまりを忘れて、ドアが、ばたんばたんゆれる」そうだ。最近の長さんの仕事はやや雰囲気かわつた。沈みこんでいる低調だというのではない、沈みこんでなにやら静かである。

●北条早雲のすべて。杉山博編、新人物往来社。早雲という人知ってますが、戦国時代はこの人から始まったんですよ、と編集者がおしえてくれた。小田原城は早雲の城だったんですよ。小田急沿線に住んでいてそのくらいのこと知らなくちゃ、だけど彼の生涯は実に謎にみちているのだなあ……。というわけでなんにも知らないデザイナーがカバーをデザインするのです。●カウラの突撃ラップ、零戦パイロットはなぜ死んだか。中野不二男、文藝春秋社。編集者氏によると戦争を知ら

さか売れるとは思わなかつた(編集者はそんなことはないよと言つてたが)前作「仕事！」に引きつづき、こんども売れてくれよの願いをこめて、「仕事！」のカバー写真(カラー)を表紙に使い、文字のレイアウトも「仕事！」と同じというなんとも奇妙なカバーの本。見返しにターケル自身の写真が刷り込んであつて、その内の一枚にアベドンかペンかが撮つた写真がある、たしか「三文役者」という題だと思ふけど、ターケルという人も実はいろんな仕事についていたことがわかる。神経の太そうな本。●手と目と声と。灰谷健次郎、坪谷令子絵、理論社。以前に箱入りの本として出版されたものをカバー装にして出したという事。値段をさげ読者のためにというより、どうやら書店対策がねらい目のようだ、出版社にとっては、近ごろこれが重大のポイントになつてきているようだ。出版社対読者

ない世代の戦記ものだそうで、なぜ死ななければならなかつたか、そこが理解できないというところから書かれたもので……。オーストラリアのある海岸に不時着してしまつた零戦のパイロットが、ずっと内陸のカウラ収容所にいれられて、なぜか突撃ラップを吹きながら大脱走、なんの計画も持たないこれは集団自決、オーストラリアの文献では、勇敢なサムライの死だなんてもてはやされているそう、どうにも疑問である。そんな気分がデザインにも影響していまいち冴えない。

●大コラム。書下ろし一〇〇人一〇〇枚、これだけ面白い人が集まると、やっぱり面白い、と思つた。小説新潮臨時増刊 84 SUMMERこれは全部表紙に書いてある文字、原田治絵、新潮社とこれだけでわかつてもらえらると思うけど、要するに小説新潮の中に、大コラムという情報があつて、それを拡大して雑誌風な単行本のような、例の

といった単純な構図ではなく、もつと複雑な流通のシステムの中で、本とブックデザイナーはきりきり舞いさせられるのです。令子さんの絵はどうもモダニズムだな、なんか変んなシツポがついてるぞ。●牧師の娘。オーウェル、三沢佳子訳、晶文社。せっかくの文章なのに、デザインがまずいねもつとなんとか出来たろうにと批評されたけど、もうこれで完結。今後気をつけます、反省。●トンボの本、聖書の世界。白川義貞、現代の茶会。井上隆、梅原猛、千宗室、白川さんの写真はすこいです。

平野甲賀

わるいくせ

四月十八日 水牛楽団が休業中なので、しばらく顔をあわせるチャンスのなかった亀田伊都子と渋谷でおちあう津野さんもさそって、あかるいうちからズブロフカなぞのみ、いい気持になる。日暮れて、酔いがまわり、金がないという津野さんをつれて家へ帰ると葉弥と悠治はむかいあってそれぞれの勉強をしていた。葉弥は遠足で行く鎌倉のことを調べ、悠治はブルーレーズでつかい楽譜を調べている。うちの書齋はアツという間に酒場にかわる、便利な多目的の一部屋。

四月十九日 夕方渋谷で小泉英政さんとあう。この秋にカラワンをよんでいっしょに農村をまわる計画を、彼はたてているのだ。はじめてその計画をきいたときから、協力を約束している。タイ語が「できる」といったって、た

かが知れているし、第一ほとんど文盲に近い。手紙を書いたりするのは時間がかかる。でもね、それでも役に立つのなら、努力はおしむまいぞ。

四月二十日 近所の商店街にオープンしためがね屋で、悠治はめがねを新調した。いろいろかけてみて、店の人に、一般的です、とか、不難です、とかいわれるのは、絶対に気に入くないのだ。わたしは目も必要以上によく見えるし、病院に通ったこともかぞえるほどで、ずいぶん安あがりになってきているなとおもう。

四月二十六日 「エレンディラ」をみる。ウソはよい。

水牛楽団が休みのあいだは、充電期間とおもって、みたいものだけを見、よみたくいものだけをよみ、ききたいものだけをきく、というふうにする。

四月三十日 疾走する「知」のハイブリッド、と題して、中沢新一と浅田彰が選んだ本のリストがある。

疾走してどこへ行くつもりなのかと、一八二冊の書名をながめているとキヤツ、水牛楽団のできるまで」というのがある。水牛楽団はできたけど、水牛楽園もできるといいだろうねえ。誤植までハイブリッドなのは、さすが。

五月五日 藤本和子さんがイリノイから帰ってきた。ほぼ一年ぶりに会う。手術のせいですがこしやせたかな。でもやつれてはいないので、安心して夕方から夜中までしゃべりあう。いまのこと、むかしのこと、これからのこと。

わたし自身の生活が世間の常識や習慣からはずれているという自覚は、今ではもちろんあるけれど、それだけではない、なにか同類の直感のようなものが、彼女の仕事だけでなく、とてもふうとはいえない彼女の生き方にまで、わたしを向かわせる。

五月十四日 朝のうち水牛の荷造り。昼すぎ下北沢のワンラブブックスに水牛をとどけ、ついでに五番街というレ

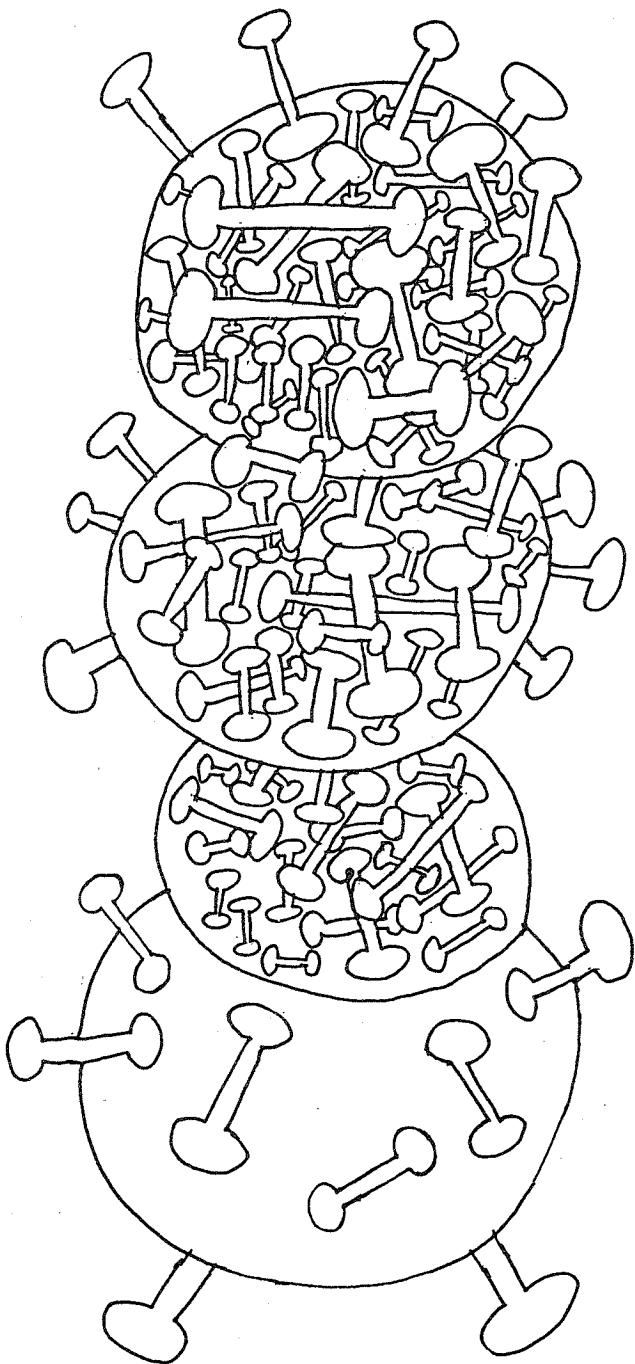
コード屋で、サボテンのLPを買う、二七〇〇円。通りがかりのカバン屋でずつとさがしていた、イメージにほぼ適う、黒い袋もみつけた、二〇〇〇円。下北沢はよいところだ。

夜はジアンジアンで、三宅榛名さんのコンサート「現代音楽は私」をきき、

かつみる。奇妙なモーツァルトは「現代音楽は私」というタイトルをなあるほどとおもわせて、思想にみちている。ゲストの西沢さんは、吹く楽器によって感じがガラリとかわるのが、みていておもしろかった。楽器と演奏者の関係にもいろいろあるってことかしら。

五月十五日 小夜子とさそいあわせて、こんやく座のオペラ「ファイガロの結婚」をみる。斎藤晴彦伯爵は出てくるだけでおかしい。バジリオのカヴァティーナはあらゆる女をあほうと歌うのだった。どうせわたしはヤセ女あほうで、小夜子はデブ女あほうですよ。

八巻美恵



下手の横吹き笛日記

4月16日 六本木に新しく出来た西武のビルの中にある、セディックスタジオで、さる弱電気メーカーのコマーシャル音楽の録音。下の階の本売場でぐうぜん悠治さんに会った。その売場に「水牛通信」を置かせてもらっているの、配達に来たとのこと。

4月17日 三時からアオイスタジオでコマーシャルのダビング。後、NHKで「午後のリサイタル」のリハーサル。
4月18日 三時半からNHK502スタ。子供番組の録音。

4月19日 先日録った、CMのとり直し。スポンサーの気に入らなかつたようだ。書き直してきたのも余り変らないように思うのだが。五時からNHKへ。「午後のリサイタル」の録音。ミヨー作曲「ルネ王の暖炉」木管五重奏の曲、当時の劇伴音楽である。ほとんどとり直しをせずに、多少のミスは

問わず、演奏会の感じてとってみた。このやり方の方が全体の流れがスムーズで良かったようである。他にマルタンの「ノネット」。

4月20日 昼近くまで寝ている。鏡でみると、目がくさりかけのカキのようだ。ブラブラしていると、麻雀のお誘い。明け方までやってきた。きょうは充実していた。

4月22日 六時半からアバコスタジオで、林光さんの音楽、俳優座で行う「肝っ玉おっ母」の録音。

4月25日 市ヶ谷サウンドインスタジオ。広瀬量平さんのコマーシャル録音。

4月27日 上野の石橋メモリアルホールで、フルートばかり七人のコンサート。楽器メーカー主催で七人全員が金のフルートを使う。獅子舞いの獅子が金の総入歯をしたよう。久し振りにえんぴ服なんていうものを出して着てみたが、よくみてみるとあれも何だか

ふざけたかっこうのものだ。
4月28日 六時から十一時までアバコスタジオで池辺晋一郎作曲の劇の音楽取り。六時から一時間程待って、実際に吹いたのはほんの一時間位。すぐに終わってしまう。

4月30日 信濃町のソニーで、カラオケのメロディー入れ。最近のはやり唄なので全然しらない節を吹く。歌詞を知らないの、原曲をきいて納得し無事終了。

5月1日 14日に三宅榛名さんの音楽会に出演することになったので、打合せのため三宅さんの家に行く。七時から信濃町のソニーへ。

5月2日 友人の笛吹、中川昌三さんが家へ来る。フルートの歌口（息を吹き込む所）を直してくれと言う。吹く人それぞれ口の型も歯の型も違うので、自分にもっとも良く合った歌口といるのがあるはずで、それは自分が一番よくわかる、見ず知らずの楽器を作

る人には、微妙な所まではわかるはずがないという持論を持っているので、今吹いている楽器はほとんど自分で作り直したものでかなりなんです。何本もやっていると、それなりに技術なんていうものが身につけてきたりして、今ではある程度の所まで直せるように思う。もっともこれまでに十本以上もダメにしたけれども……。そうそう、それで中川君の楽器を直してあげる。大変気に入って帰る。もうすぐお中元の季節、何かくるなあ、きつと。

5月3日 又々信濃町のソニーへ。二曲録音して、鎌倉へ行く。車で北鎌倉から鎌倉まで一時間かかった。こりや何だという位の人が歩いていて、休日

の鎌倉はひどい。本当にひどい。
5月4日 一時から三時までサウンドインスタジオ、CM録音どり。七時からNHK509スタジオで、武満さんの音楽、何かのテーマMだと思ふ。木管楽器ばかりのめずらしい編成。

5月5日 三里塚の小泉英政さんのお宅へ、福山一家と共にたけのこ掘りに行く。二、三本も掘ると切れる息や泥だらけになって遊ぶ子供達をみるとやはり都会に住む不自然さのようなのを思い知らされる。山のようにいただいたたけのこや野菜、山菜を帰りに悠治さんのお宅にもおすそわけ。小泉さんどうもありがとう。

5月7日 テイチク会館でダビング。
5月9日 十一時からサウンドインスタジオで録音。三時に三宅榛名さんのお宅へ。14日のジャンジャンのコンサートで演る曲で、まだ出来てないのがある。大丈夫かなあ。

5月10日 一時にコロンビア1スタへ。アルトフルートで何やらカラオケのダビング。

5月11日 三宅さん家へ。最後の練習のつもりであったが、前日もう一度やることにする。曲一つ一つは出来てはいるが、全体の流れが今一つつかめ

ない。

5月13日 アオイスタジオでコマーシャルの録音。一時間半待って、十分で終る。最近マルチチャンネルとして、基本的な楽器を録音しておいて後でメロディー楽器を録音したりするのでこのような事が多い。仕事としては非常に楽で良いが、どんなものをやっても何となく不満が残る。夜、三宅さん宅へ。何とか流れがわかった感じ。
5月14日 ジャンジャンで三宅榛名さんのコンサートに出演。前半、三宅さんが一人でピアノをひく。すごく自由な感じ、特にモーツァルトがおもしろい。後半は一緒、バスフルート、フルート、ケーナ、パンパイプ、洋琴を使う。さあと言って始め、妙な方向へずれていく。何とも絶妙である。こんなやり方もあるんだなあ。お客さんも沢山入り、まあうまくいったかな。

西沢幸彦

友だちと呑めば本になる

ひさしぶりに晶文社をたずねてきた佐藤信と、お茶の水駅前の喫茶店で話す。昨年の秋から半年ほどかかって、ようやく「黒テント」の組織的なくみかえが一段落したらしい。

私が「黒テント」の活動から遠ざかって、もう三年になる。はじめは「しばらく休ませてくれよ」程度のつもりだったが、ひとつの集団にながれる時間の速度はゆっくりしているようである。案外、はやい。いまの「黒テント」は、三年まえに私の一時的な隠居をみとめたそれとおなじであって、しかも、まったく別の集団である。顔ぶれが変化しただけではない。集団のなかでこのばのつかい方や身ぶりにも微妙なちがいが生じている。これから私がそこにもどつていこうとすれば、つとめて、あたらしい言語体系を習得しなければなるまい。なかなか楽ではないぞ。

日本のさまざまな土地にこうしたきまじめな放蕩息子たちがいて、地つきの諸運動にかかわる人たちと手をたずさえ、ときに、というより、しばしばそっぽをむきあいながら、この間のジャズや芝居の場をささえてきた。岡崎でお医者をやっている内田さんもその代表的なひとり。いまは昔——まぼろしの銀巴里セツシヨンの時代から、病氣・金欠・クスリなどになやむミュージシャンたちの共同のおやじといった役どころをひきうけて、こんにちにいる。持続的な熱中という点にかんしては、私はまったく自信がない。そのぶんだけ内田さんのような人に興味をひかれる。

翌日の昼、京都につく。待ちかまえていた橋本憲一が、カイちゃん、残んの桜を見せてやるよと、バスみたいに巨大な車に私たちをのせて琵琶湖の北端までつれていってくれた。れい子夫

一九七〇年代のおわりから、この集団は必要あって活動のクモの手を八方にひろげてきた。ひきつづき半年間の腕ぐみ。なにしろ腕ぐみするのがクモだからね、おおいにこんぐらかる。その結果、ようやくメドがついたらしい組織上の問題については、いま当事者でない私がうんぬんすることはなにもない。マコトは持ちまえのつよいアタマで、あいかわらずギリギリ考えつめている。「このへんで柏餅を売つてるとこない?」「さあ知らねえな」「そうか。……だったらその辺を散歩してみるよ」と、旧連雀町方面にむかうたらだら坂をつんのめるようにしておりていった。

戯曲『灰とダイヤモンド』著者校のゲラ、きょうももどらず。

三時きっかり、二分後に出発する予定のヒカリ三六五号にのりこんだ。すでに席にすわっていた高平哲郎が、こ

人、四人の子どもたちも同行。この一家は原則として単独行動をしない。家族の行動が学校や幼稚園のきまりに優先する。

かれらは百万遍で「梁山泊」という小料理屋をやっている。そのシロウト商売のてんやわんやについて「包丁一本がなばつたんねん」という本をかいた。かれらの店がなんとかなりたつようになつたのは、とりたての魚を京都にはこんできて、路上であきなう伊勢湾の漁師とめぐりあったからだ。その魚が、よその漁場で密漁したものであったことがわかった。イキのいい魚をくいたい、くわせたいというささやかな欲望をみたそうと思えば、いやもおうもなく、あたらしい友人である漁師たちの海賊行為に加担せざるをえなくなる。納得がいかない。その理由をつきとめてやろうと、お父さんは一年半、休みのたびに手あたりしだいの漁場・市場・役所を駆けめぐった。もちろん

れ、食堂車ついてないんですつて、とそいでつげる。おおいに落胆。開店と同時に食堂車にかけこみ、そこが最上と自分たちで勝手に信じこんでいる特定のテーブルを確保して呑む。それがかれと新幹線にのるさいの唯一のたのしみなのだ。

名古屋着。ホテルに荷物をおいて、すぐに納屋橋のヤマハ・ホールにかけつける。十年がかりでつくった内田修さんの『ジャズが若かったころ』というちいさな本が、ようやく数日まえにできあがった。それにあわせて、かれの主催するジャズをきく会の創立二十周年を祝うコンサートがひらかれている。渡辺、高柳、山下、日野兄弟、坂田、富樫、森山など。

終演後、ちかくのジャズ・クラブで出版記念会。鹿児島で「黒テント」の面倒を見てくれた中山信一郎さんがいる。とうとう家業をつぶしましたとのこと。

自家用バスに家族全員をつみこんでね。車中でその話をきく。やるもんだね。いつのまにか、陽気な小料理屋のダンさんが日本の漁業と環境汚染の専門家になっていた。桜よし。くわえて夜は「都おどり」をふるまわれる。ただし全員疲労。いぬむりの列。「都おどりは、よーいやさア」という開幕の掛け声を英訳すると、「シャル・ワイ・ダンス・ザ・チェリーブロッサム・ダンス」となるということを知った。

津野海太郎

編集後記

今回フィリピンで覚えたタガログ語はたった三語。カラバオ、ゴメラ、バヤである。カラバオは水牛。フィリピンもタイ同様水牛が多い国だ。また木彫りの土産物にも水牛が圧倒的に多い。本物の水牛は、牧場で二頭が長い綱につながれ、のんびり草を食んでいるかと思えば、その背に人を乗せ、車の放列の中でもマイ・ペースで歩いている。ゴメラとはハイビスカス。この国は日本でもなじみのこの花に、「八重」のものがある。前者はシングル・ゴメラ、後者はダブル・ゴメラと、「チャンポン」で呼ぶそう。バヤ、とは支払いを意味するようで、ジプニーに乗った時に誰もが使う。十二人乗りトラックともいうべきジプニーは、まことに騒々しくそれについて乗っている人はこの時ばかりはまことに親切で、運転手は魔法使い、なにしろ、運転をしながら、ひとりひとりから料金を受取り、細かくおつりを渡し、歩道にいる人々を勧誘し、そのうえ、乗客を乗せたまま、ジプニー同志で競走までする。車体はイスズを中心に日本のものが多いが、その使い方は、近代日本に一度もなかったユニークなもの。(田川)

桜庭章司さんの「てがみ」は、八巻美恵にあてられた私信です。桜庭さんとは水牛通信が月刊になったところからのつきあいで、よく手紙をいただきます。水牛のために原稿をおねがいはしてはありますが、今回のこの手紙は、わたし個人のものにしてしまふより、水牛を手にするすべての人が読むべきだとおもい、桜庭さんの許可をまたずに掲載することにしました。「PU(獄中者組合)特派員」として府中刑に「駐在」しているという桜庭さんのことですから許してくださいましょう。桜庭さんの住所は、府中市晴見町4の10です。また、桜庭さん救援会が、文京区本郷7の3の1東京病院精神科病棟一研の気付にあります。会報には桜庭さんの文章が毎号のついでます。

ブタ草の竹内晶子さんは如月小春さん率る劇団ノイズの女優さんです。6月9日から17日まで「トロイメライ 子供の情景」と題する公演があり、彼女はソロダンスも御披露するそうです。会場は丸井新宿店インテリア館8Fのマルチパーパス。くわしくは〇三二三五六―七五三三ノイズまで。(八巻)

*予約購読の申し込みと送金は郵便振替を利用してください。

口座名 水牛編集委員会

口座番号 東京四一九一七九二

購読料 一年分三〇〇〇円(送料共)

住所 氏名 電話番号、何号からと明記。

*本誌は次の書店にあります。

横濱舎(新宿) ☎三五二―三五五七

ブックイン(阿佐谷) ☎三三三―七八九七

信愛書店(西荻窪) ☎三三三―四九六一

ワンラブブックス(下北沢)

アイブックス(目黒) ☎四一―八三〇二

アール・ヴィヴァン(西武池袋店12F)

カンカンポア(西武渋谷店B館B1)

ストアデイズ(六本木ウエイブ4F)

名古屋ウニタ書店 ☎七三二―二三八〇

水牛通信

第六巻第六号

一九八四年六月十日

定価 二〇〇円

発行人 堀田正彦

発行所 水牛編集委員会

〒154東京都世田谷区新町2-15-3

八巻方

電話〇三(四二五) 九六五八

振替口座東京四一九一七九二

印刷所 (株)トライプリントショップ